



Kokushikan
University

FD News letter

国士館大学 FD ニュースレター

May 2013

編集・発行/国士館大学FD委員会
発行日/平成25(2013)年5月25日
〒154-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1
TEL.03-5481-3111 (代)

Vol. **3**



教育の質的転換と質を伴う主体的な学修の実現

FD 委員会委員長
磯辺 武雄

今号は、本年3月がFD委員会設定の3期6年間の推進事業計画で、第2期(平成23年度、平成24年度)のワーキンググループ活動報告書の取りまとめの最終時期にあることから、先般、第8回FDシンポジウム「第2期FD委員会の取組」において、各ワーキンググループからの活動報告および第1回FD研修会「カリキュラムの可視化マップ作成研修会」等の概要を中心とした内容となっている。なお、第2期の活動報告書(最終)は、シンポジウム参加者の方々から頂いたご意見等を踏まえて取りまとめる予定にある。

さて、18歳人口は、1992年度に約205万人で60年代後半に次ぐピークを迎え、2013年度には約123万人までに減ってきている(但し、2012年度は約119万人)。また、2014年度(約118万人)からは更に減少傾向を続け、2028年度には、ついに約100万人を切る状況にある。今や大学進学率は5割を超へ、新入生の学力不足に加え、目的意識の希薄化、学習意欲の低下等は、多くの大学の共通した課題となっており、この打開策の一つとして、学生の質確保等を目的として入学定員の削減を導入する一部の国公立・私立大学も現れてきている。

文部科学省は、平成20年12月の「学士課程の構築に

向けて」の答申で質的転換のために、学士力の明確化のもとに、教育課程の体系化、単位制度の実質化、教育方法の改善や成績評価の厳格化等を提起し、大学の改革・改善を求めている。しかし、その答申から4年余が経過した今日において、一部の改革・改善の兆しは見られるものの、大学全体としての質保証の取組についてはまだ十分には進んでいない。

こうした中で、昨年3月の中央教育審議会の「審議まとめ」では、予測困難な時代にあっては、生涯学び続け、主体的に考える力、対応できる力を育成することを大学教育に求めている。未知の時代を生き抜く力を育成するには、これまでの講義型(教え込み型)の教育形態(スタイル)から双方向型、対話型、グループ討議型といった、受身的授業から能動的授業へ、つまり学生が学習意欲を持って主体的に授業に取り組む授業形態(アクティブ・ラーニング)への移行を目指す大学が増えつつある。

学生の学力不足、学習意欲の低下等という課題を抱える中で、今や大学教育の質的転換と質を伴う主体的な学修の実現に向けた教育マネジメントが求められる。本学でも改めて目指すべき新しい大学像のあり方を描くべき時期を迎えているといえよう。

ワーキンググループ活動報告

■第1 WG活動報告

第1 WGは、近年の厳しい就職状況に対応するため、就職力を高めるための働きかけや資格取得に向けたプログラムを準備する大学がみられるようになって来ている。本学においても、各学部や個人において様々な取り組みが行われているが、その現状や成果に関する情報は共有されていない。

第2期後半の第1 WGの活動内容として、①キャリア教育における専任教員の負担②キャリア教育の効果の2つを活動内容とした。

(1) 各学部の取り組みと専任教員の負担

キャリア教育に関係する取り組みについて、単位化の有無、実施期間、外部委託の有無、主な内容、具体的な実施方法、予算・経費などの項目を中心に取りまとめた。(取り組み内容等の調査結果は第2号で報告済み)

単位化に関しては各学部とも卒業単位に組み込まれ、キャリア教育も定着しつつあるが次のような問題点も見られる。

- ①専門科目とは趣向が異なり、担当教員の負担増になっている。
- ②業務委託による経費の捻出も問題化している
- ③業務委託に伴う単位認定者の問題も浮上している

(2) キャリア教育の効果

就職状況の把握はキャリア形成支援センターが実施公表をしているが、学生が本来希望している職種に就いているかは未調査である。

卒業生の追跡調査の必要性を鑑みる観点で、政経学部・体育学部の過去5年間の卒業生にプレテストを施行した。結果として、回収率の低下・模範回答のみ返信・本人以外の調査は個人情報保護の壁がある等問題点が多く、その後の検討・再調査は行っていない。

(3) 今後の課題

各学部が取り組んでいるキャリア教育は、目的や方法が多岐にわたり、試行的なものが多い。今後、本学の状況に適したキャリア教育を実施していくためには、キャリア形成支援センターとの連携・卒業後の就業状況を把握することで、有益な情報が提供されるよう何らかのシステム構築を検討していく必要がある。

第1 WG座長 川田儀博

■第2 WG活動報告

第2期の活動を総括すると、第1期の活動成果を踏まえて「授業アンケート」の改善を行なうことと、その延長線上にある本学にふさわしい「学生とともに進めるFD」のビジョンの検討という2点に集約することができる。

国内の大学で学生による授業評価等の取り組みがはじまって20年を経過する中で、様々な改善や模索が各大学で試みられてきたが、本学でも、導入時から10年近くを経る中で、いくつかの問題点や課題が認識されるようになり、2009年のFD委員会発足後本グループ第1期の活動の中で、こうした問題点や課題を整理することが試みられた。こうした試みを踏まえて、今期は実際に、教務部が行なった、2003年の最初の導入検討以来の、大幅な「授業アンケート」の改善作業にかかわることができた。詳細は別の機会に譲るが、これまでの「授業アンケート」の基本内容はそのままに、実施体制関連の問題を含め、改善課題と認識されてきたほぼすべての点に、一応の対応を行なうことができた。

とはいえ、こうした対応は終着点であろうはずもなく、新たなステージへ近づくためのほんの一步にすぎない。そうした新たなステージに待ちかまえる課題が、今期活動のもう一つの検討課題であった「学生とともに進めるFD」への取り組みである。

こうした取り組みは、いうまでもなく、2008年のFD義務化以降、FDの最重要キーワードとされる“学生の主体的な学び”の確立(中教審・文科省)という文脈の中で重要度を増してきたものである。具体的には、「アンケート」等を利用し、授業を受けた学生の受け身の意見を集めて授業改善に結びつけるという平面的な取り組みから、“学生の主体的な学び”の場としての授業という位置づけに立って、アンケート自体の改善やカリキュラムデザインにまで学生の皆さんにかかわって貰おうという立体的な取り組みに向かうことなどを意味する。

そこで、そうした取り組みを視野に入れ、2学部所属の十数名の学生に、今回の「授業アンケート」改善について意見を述べて貰う場を設けるなどの試みも交えながら、本学にふさわしい「学生とともに進めるFD」のビジョンについての検討を試みた。実際に耳にできた、アンケートでは決して触れ得ない、学生諸氏の真摯で鋭い意見に自信を深めながら、こうした検討の帰結として、「授業アンケート」改善を軸とした学生FDスタッフ制度導入の提言を行なうことになった。

第2 WG座長 佐藤研一

■第3 WG活動報告

今までの第3 WGでの検討事項に関連して特に報告すべきニュースとして、GPAの導入に教学の新体制が熱心となり、標準的なGPAの導入が今年以降実現する可能性が高まったことがあろう。もとよりGAPの全学的な導入はFD活動にとって基本的に有益となりうる。ただし、そのためにはいくつかクリアしなければならないこともある。

まず、それは学内の正当な手続きを経て、すくなくとも教員の総意、つまり、教授会での承認（また可能な限り学生からも大方の賛同）を得ながら、大学全体の十分に積極的な関心を背景として実現することが望まれる。だが現状では、FD委員会という組織と学部、教務主任会、そして教務部との組織的な関係が曖昧であり、委員会と従来の教学の組織体制とが十分な連携を形成しているとは言い難い。教務部長は大変である。苦労されているところであろうとお察し申しあげる。

さらに、FD委員会はたんに世の中の流れでそれなりに声高だか、実はかなり形式的にだけ求められていることを、現場の実情におかまいなくただ導入するための形式的な会議体ではない。私たちは、世の中が求めていることを、本学の実情にあった形で効果的に展開する実質的な施策を検討してきたし、その結果も出してきたのだが、今回の動きでは、残念ながら本WGが提言してきたような、本学に見合った、より具体的で特徴的な内容は、一つも盛り込むことができていないようである。過当競争の中、大学に個性が求められているとすれば、世の中の流れに何とか合わせているだけでは、多分、競争に負けてしまう。

確かに、いずれも今後の課題なのであろう。FD活動には時間が必要だ。なんと言っても、ことがらの本質に関わるようなボディーの改変は、化粧をして済ませるというようなわけにはいかない。倦まず弛まず、ゆっくりと持続する意志が必要だ。とはいえ、これは、何かいつも落ち着きのない私のような者にはなかなかきつい。

が、今後、本WGは授業公開の在り方について具体的に検討していくことになる。

————— 第3 WG座長 木阪貴行

■第4 WG活動報告

第4 WGは、例年、シンポジウムの企画・運営と、当該期間ごとの研究テーマの調査と提案、という二つの仕事をするようになってきている。第4 WGのこの期間の研究テーマは、「リメディアル教育」であった。また、24年度中でのシンポジウム等の企画としては、2012年12月22日に行われた第一回目のFD研修会、そして2013年3月16日に実施された、今期の総括としての意味をもつ第8回FDシンポジウムがあった。

第1回FD研修会と第8回シンポジウムについては別稿に譲って、ここではリメディアル教育に関する調査・研究活動について簡単に述べたい。

リメディアル教育の必要性は、近年の日本の少子化傾向に伴う18歳人口の大幅な減少、その結果、大学入試のハードルが低くなり、大学入試の全入時代、などという言葉も現実味を帯びてくる現状から生じている。

一部の大学・学部・学科では、本来大学教育を受ける学力に疑問のある学生までもが入学してきている実態がある。

このことは全国的な問題で、今では日本中の多くの大学でこの問題への対策が講じられている。曰く、入学前教育、初年時教育、学習支援室の設置、リメディアル科目の単位化、チューターや高校リタイア講師の特別任用によって個別な学習支援に当たる、などの試みがなされている。本学でも一部の学部ではすでにリメディアル教育の試みはなされており、それらの貴重な知見を学内で共有すべく、2012年3月10日には学内で、第7回FDシンポジウム「リメディアル教育の現状と課題」と題したシンポジウムを開催した。この会合は幸いなことに予定時間を超過するほどに質疑応答が白熱し、このテーマを担当している第4 WGとしては、大変心強い思いをしたところであった。本学でもリメディアル教育への関心が高まっていることを示しており、これは現代の大学に籍を置く教職員として、健全な認識であると実感した。

本WGでは、期間1年目は、全国各地の大学の事情を探ったり、日本リメディアル教育学会に入会して情報収集に努めたりした。2年目は、日本語教育、理数系教育、英語教育、その他（組織など）、の調査項目に分けて、全国の先進的な試みをしている大学での現状と課題を調べ、しかる後に本学でのリメディアル教育の実施に向けての提言をとりまとめた。

その成果は2013年3月16日の第8回シンポジウムで発表し、報告書でもまとめたところである。

————— 第4 WG座長 濱中修

■第5 WG活動報告

第5 WGは、FD活動の政策的課題を中心に据えて議論してきたが、今期も「新たな教養教育像を求めて」をテーマに掲げて検討作業を行った。教養教育の改革議論の展開の方向性として、以下の4つの論点を提示した。それは、①改革のためには何が必要か、FD委員会の果たすべき役割を問いかけ、②建学の精神をめぐる議論の活性化をはかり、③共通科目を基盤とする大学教育のもう一つの出口の可能性を模索し、④新たな提言を探り、提起することにあつた。

その①においては、FD委員会の役割として、「意識改革+構造改革（民主的手続）」を喚起すること、あるべきモデル案の提示を通して論争・議論を学内に巻き起こすことにある、というFD委員会のとるべきスタンスが確認された。そこで多様な議論として、「学科の形態をとらない教養教員組織が、学生の入学から卒業までにどのように関わり合えるかについての、ひとつのモデルになり得るものを目指す←内側からの構造改革」、「学科との連携をつねに確認しつつ、大学教育の複線化をめざす←新たな仕組みの必要性」、「共通科目の多様な可能性をさぐる、それが教養教育の未来←オムニバス方式学際科目の提案・導入」（=専門教育に知的関心を持ち得ない学生へのもうひとつの学修の道の提案となる）、・・・があつた。

その②建学の精神をめぐる議論の活性化では、「我々はどこから来たのか？→どちらに向かうのか？」が今聞

われている」のであり、どちらかと言えば、ルーツ思考の復古主義から温故知新型への展開、すなわち現代に生きる我々にとって、建学の精神はどういう学問的テーマと結びつけられるのか？が問われていると考えられよう。

その③では、大学教育の目標は、専門・共通の別なく「教養教育」へ向かうべきであつて、多様化する学生の知的関心に応えるよう、両者は相互補完的に共存し、カリキュラムの広がりや深みを確保しなければならないとする視点の受容であろうか。

そして④提言として、「国士館大学固有の授業科目として、学部横断型・全学教養ゼミ的な授業科目新設」が取り上げられ、その定着に向けた方法論としては、両論の併記として、以下のAB二つの提起がなされた。A：科目提示実践型=科目（オムニバス形式）案を提示して当該科目を担う教員の議論と実践を通して改革。具体的実践例としては、「社会的起業を考える」「資本主義を考える」「技術の進歩と生命倫理」という科目新設から知的探求を現代社会の課題へつなぐという考え方。B：仕組み作り（制度補完）型=多様化を推進する「単位認定の仕組み」を提示して、体験学習型（ボランティア、エクスターンシップ等々）外部講座の導入を通して学生の学びの主体性を涵養する。その単位化の仕組み作りとして「サービ斯拉ーニング」センターを構築しよう、とするものであつた。

第5 WG座長 加藤直隆

国士館大学 FDシンポジウム（第8回）内容報告

国士館大学 第8回FDシンポジウム

日時：平成25年3月16日（土）
会場：世田谷校舎5304教室

第8回のFDシンポジウムが平成25年3月16日（土曜日）の午後1時から世田谷校舎5304教室にて開かれた。このシンポジウムは、平成23年度・24年度の2年間に調査・研究期間とするFD委員会第2期の活動を締めくくる報告会としての位置づけを持つ会である。第4 WGの飯塚委員の司会にてプログラムが進行し、磯辺FD推進室長および山崎副学長の挨拶に引き続き、各WGの発表が行われた。

第1 WGの今期の研究テーマは「キャリア教育」で、体育学部の川田儀博委員が本学の各学部のキャリア教育への取り組みの現状を紹介した上で、「キャリア形成支援センターとの連携強化」、「学外の専門

家によるキャリアサポート強化」、「本学OB・OGのさらなる活用」、「卒業生追跡調査の実施」などの提案をした。

第2 WGの研究テーマは「FDへの学生の取り組み—授業アンケート改訂を出発点として」で、グローバルアジア研究科の佐藤研一委員が発表した。既に実施されている授業アンケートの問題点や記入項目の改善点の報告、学生をFD活動に巻き込むために「学生FDスタッフの導入」などが提案された。

第3 WGの研究テーマは「授業改善・方法への取り組み」で、法学部の和田義浩委員が報告した。授業改善という広範なテーマを、今回は教室の教育環境の適正化、教育機材（コンピュータやプロジェクター等）の整備というハード面の問題と、特色ある授業の教員間での情報共有、成績評価に関わるGPA導入というソフト面の両面から報告がなされた。

第4WGの研究テーマは「リメディアル教育」である。人文科学研究科の濱中修委員が日本語教育を、イラク古代文化研究所の西浦忠輝委員が理数系教育を、経営学部の池元有一委員が英語教育をそれぞれ分担して報告した。受験生人口の減少やそれに伴う筆記試験に拠らない推薦入学者の増大などにより、全国の大学でその必要性が認識されてきている当該問題に対し、プレースメントテストの実施とそれによる習熟度別クラスの設置、学習支援室や、パソコンやプロジェクターを備えて自由に学生たちが活用できるラーニング・ルームの設置と学習相談者の配置、学生たちの学習意欲を高めるための方策として、リメディアル教育をキャリア教育の一環として位置づけることなどが提案された。

第5WGの研究テーマは「教養教育」である。法学部の加藤直隆委員が報告した。高等教育機関たる

大学の教育の目標は、専門科目、共通科目の別なく基本には教養教育をおくべきこと、建学の精神を現代に活かすべく、本学は「知の侍」たる人材を養育すべきことなどが熱く語られた。

各WGの報告のあと、発表者それぞれに対してフロアから活発な質問がなされて、ここでもまた熱い議論が交わされた。議論の余熱が残る中、岸本教務部長の閉会ことばをもって全てのプログラムを終了した。第二期のFD委員会の取り組みの報告をつぶさに見聞し、本学のFDへの取り組みが着実な成果を挙げていることを実感した。各WGの提案がひとつでも多く本学で実施されることを願わずにはいられない。最後に、煩雑な準備作業を着実にこなし、会をスムーズに運営してくれたFD推進室のスタッフに感謝申し上げる。

——— 第4WG座長 濱中 修

活動報告 政経学部

熊迫 真一

政経学部のFD活動としては、AO入試合格者に対する入学前教育、新入生全員を対象とした導入教育ならびにキャリア教育、従来の講義を補完する寄付講座、中退者の低減を目指す修学支援プロジェクトなどが、主たる取り組みとして挙げられます。

◇入学前教育

AO入試の場合は早期に合格が決定するため、AO入試による入学者は合格決定後の学習意欲の低下の悪影響が大きいと考えられます。政経学部では、AO入試導入当初、合格者に指定図書を読む感想文を書かせ、専任教員が分担してコメントを返すという取り組みを行ないました。この取り組みはフィードバックする内容のすり合わせが困難である事などから、十分な成果を挙げるには至りませんでした。そこで、翌年から外部の企業を活用し、課題とフィードバックの質の向上を図りました。その後、依頼する企業をより実績のある企業に替え、内容にも改善を加えています。平成24年度においては、ロジカルライティングのベーシックスキルを身につけさせる課題を出しています。

◇導入教育・キャリア教育

政経学部ではもともと少人数教育に注力してお

り、3・4年生対象の専門ゼミナールに加え、専門分野の学習に入る準備として、2年生対象の基礎ゼミナールも開講していました。その後、新入生を対象とした導入教育の必要性が高まり、少人数教育を更に充実したものとするという意味合いもあって、ゼミナール形式での導入教育としてフレッシュマン・ゼミナールを開講しました。

このフレッシュマン・ゼミナールは、基礎的な学習方法、日常生活の注意、人間関係構築など、大学生活にスムーズに適應できるようにという観点で、幅広い内容を盛り込んだものになっており、その担当にあたっては、専任教員だけで行なうことにしておりました。

近年、キャリア教育の重要性が指摘されることになり、大学にも具体的な対応が求められるようになってきました。もともと、就職活動の重要性についてはフレッシュマン・ゼミナールの内容に含まれていましたが、広義のキャリア教育を専門外の専任教員で実施することは困難でした。そのため、外部の企業を活用して、フレッシュマン・ゼミナールの一部にキャリア教育の内容を含めることにしました。平成24年度は、通年科目であるフレッシュマン・ゼミナールのうち、年間10回程度をキャリア教育に充てました。平成25年度からは、更にキャリア教育にあたる部分を拡充し、春

期を導入教育部分、秋期をキャリア教育部分として、よりまとまりのあるものになっています。

◇寄付講座

専任教員のような研究者による講義は、学問的背景や研究上の潮流を踏まえたものである反面、実社会の動きからすれば若干遅れたものになりやすいと思われます。学力養成にあたっては、研究者による講義に加え、実務家による実社会のダイナミズムを伝えるような講義も開講できれば、より効果的であると考えられます。

このような問題意識から、平成24年度において寄付講座を希望する企業との間で内容面での検討を重ね、平成25年度より経済特別講義Ⅰとして寄付講座を開講できるようになりました。

◇修学支援プロジェクト

国士舘大学の中退率の高さが指摘されてきたのを受けて、平成24年度より4年間の予定で修学支援プロジェクトをスタートさせました。

平成24年度は現状把握を主眼としており、中退率の正確な算出や、在学生・教員を対象とした聞き取り調査、他大学の事例調査などを、外部企業を活用して実施しました。

現状把握により、いくつかの問題点が明らかになってきたため、今後は中退者低減に向けての対応策の検討・実施に入ります。

上述の通り、平成25年度からは、修学支援プロジェクトでの現状把握を踏まえ、いくつかの新たな活動に着手することになります。より多くの教職員を巻き込みながら、政経学部が一体となった取り組みとなるように努めていきます。

活動報告 21世紀アジア学部

竹村 英二

21世紀アジア学部では、下記8項目を平成24年度の活動指針として定め、実行した。

- 1 入学前教育
- 2 初年次教育
- 3 少人数教育
- 4 キャリア教育
- 5 FD への学生の取込み
- 6 授業方法・環境の改善にむけた取り組み
- 7 リメディアル教育
- 8 教養教育

まず、入学前教育であるが、12月までに合格通知を発送した学生、そのなかでもとくに、所謂「受験勉強」の過程を経験してこなかったAO入試等で合格した入学生を対象に、小論文の作成演習の指導を行なった。手法的にはおもに通信教育のかたちで、何人かの教員による指導を実施した。

初年次教育であるが、学生の希望を反映させながら、1年生時の少人数教育の課程である「総合演習」のクラスの改善のための施策が行なわれた。とくに、教室で講義形式の授業をうける「座学」のほか、全部の総合演習クラスにおいてではなかったものの、図書館研修、情報メディア研修などを取り入れ、専門課程に入った後に必要な基盤的知識・技術の獲得のためのプ

ログラムが実施された。図書館研修では、設備についての基本的知識獲得にむけたプログラムのほか、図書・学術情報の効果的な獲得のためのOPACを使っての研修プログラムも実施されたほか、クラスによっては国会図書館に足を運んでの現地研修なども実施されるなど、専門課程において必要となる基礎的な学術情報の処理能力向上にむけ、極めて有効なプログラムが各々のクラスにおいて実施された。

また、本年度（平成25年度）より、公文式の初年次教育プログラムが、総合演習のクラスで実施されるはこびとなったが、平成24年度の最後半（平成25年3月）に、総合演習で実施されるプログラムの一部を入学前の段階でためす試みがなされた。

少人数教育は21世紀アジア学部が学部開設当初より取り組み、各学年において鋭意実施しつづけているものである。開設当初より一年生の段階からのゼミナールを開設、一年次と二年次のこれにあたるのが総合演習である。また、大教室のクラスにおいても、適切な人数を超過しないよう、履修段階で制限をもうけるなど、様々な次元で少人数教育実現を目指した施策が実施されている。

キャリア教育の活性化にむけて実施した施策としては、就職活動前における学生の意識の喚起にむけたしくみづくりである。平成24年度にはとくに、二年次に、

「キャリアデザイン」の授業を配置した。これは、学生の意識の喚起と活動の具体的なやり方のイメージづくりに役立った。就職活動“解禁”の時期がずれこみ、来年度以降は四年次にずれこむことも想定され、この与件に沿ったかたちでの対策を考えねばならない。とくに三年次における施策の具体化が課題である。

FD活動に学生を取り込む施策としては、とくに平成23年度において、就職活動に関連した講演会を実施し、学生の参加をつのった。企業の人事畑の第一線で

活躍する企業人をゲストに招いての講演会で、好評をばくした。平成24年度は予算の関係で実施が適わなかったが、本年度には再び実現したいと考えている。

授業環境の改善、とくに教室の増設、機器の性能向上、故障設備の修繕に関して法人に上申しているが、まったく改善されていない。学生にも不利益を被ることなので、早急な改善を再度要求したい。

リメディアル教育は主に総合演習のクラスで実施、学生のレベルに鑑みての教育を実行している。

活動報告 総合知的財産法学研究科

飯塚 真

近年の急速な技術革新や企業活動の国際化に伴い、各企業が知的財産への明確な戦略を持つことが求められるようになってきていることを受け、総合知的財産法学研究科は、学生に対して、法律の基礎である憲法、行政法、民法、民事訴訟法などを習得させ、さらに経営・工学系の科目までを網羅し、総合的な観点から知的財産法学を学ばすことで、知的財産の創造・保護・活用・紛争処理能力を持った知財プロフェッショナルの養成を目指している。

このような人材養成の目的に沿って、コースワークの充実を図るなど、学生が体系的に学位を取得できるように教育プログラムを編成し、FDの場において、その目的と内容を教員間で共有し、その内容を各教員が実践し、本研究科全体でそのプロセスを管理・検証を行うことによって、大学院教育の実質化を図り、学生の質の保証を行えるように努めてきたところである。

ところで、平成23年の中央教育審議会答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」によれば、「学位プログラムとして体系的の大学院教育を確立し、学生の質を保証するためには、人材養成の目的や習得すべき知識・能力を明確に設定し、これに基づく教育の展開、評価、改善のサイクルが確立された組織的な教学マネジメントを構築し、必要な知識・能力を確実に修得させる組織的な教育・研究指導體制が不可欠である」とし、学生の質を保証する組織的な教育・研究指導體制の確立を、各大学院に求めている。

これに対して、本研究科は、教育体制については、さらなる深化をしていく必要があるものの、前述した通り、既に取り組みを始めている。今後の課題は、研

究指導體制の充実であると考えている。平成23年の中央教育審議会答申は、「高い専門性ととともに幅広い視野を備え、専門分野の枠にとらわれない独創性・創造性をもった人材を養成する観点からは、異なる専門分野の複数の教員が論文作成等の研究指導を行う体制を確保することが重要である」とし、複数の教員による研究指導體制の確保を求めている。

本研究科は、総合的な観点から知的財産法学を学ばすことで、知的財産の創造・保護・活用・紛争処理能力を持った知財プロフェッショナルを養成するという目的を実現するために、すでに指導教員1名、教育指導教員2名による複数の教員による研究指導體制を採用している。しかしながら、物理的・時間的制約など様々な要因から、いわゆる主査の教員である指導教員の研究活動に多くを依存する傾向がみられ、指導教員と教育指導教員との役割分担と連携体制が不明確である嫌いがある。

本研究科の人材養成の目的の実現をさらに図っていくために、教員間において前述した問題意識を共有し、多様な専門・能力をもった様々な分野の教員によって、個々の教員の専門の領域を超えた研究指導體制を学生に提供するため、学生を担当する指導教員と教育指導教員が綿密に協議し、それぞれの役割分担と連携体制を明確にする必要性について、教員間のコンセンサスを得て、平成25年度においては、他の大学院の研究指導體制の現状と優れた事例などを調査研究し、複数の教員による研究指導體制の実質化など、本研究科にふさわしい研究指導體制を充実するための方策について、より一層の検討をすすめていきたいと考えている。

FD 関連総会出席報告

2012年度「全国私立大学連携フォーラム」年次総会報告

日 時：2012年6月16日
会 場：中央大学後楽園キャンパス
参加者：加藤直隆

我が国士館大学も加盟する「全国私立大学連携フォーラム」は、学生の規模や多様性の面で共通の課題を抱える中規模以上の私立大学が互いに持てる力を出し合い、FD分野において連携することを目的として結成されたものであり、実践的なFDプログラムを共同開発・共同実施することを通じて、学生を主体的学習者に育て、私学の教育の質を保証することを大きな目的として結成（代表幹事校：立命館大学）されたものである。そのフォーラム年次総会（2012年6月16日）が東京の中央大学後楽園キャンパスで開催された。

今年のパネルでのテーマは「大学の教学や運営への学生の主体的な参画」が取り上げられた。いわゆる「学生参画・学生FDスタッフ」という学生による大学の教学や運営への主体的な参画やピア・サポーターとして学生が大学の授業に関与する活動等の取り組みについて、以下のような実践的活動①～⑧が報告された。

①「KYOPROで実践するピア・サポート」土屋貴之氏（法政大学学生センター市ヶ谷学生生活課）②「学生参画（学生FDスタッフ）について」川上忠重氏（法政大学教育開発支援機FD推進センター長）③「学生参画の大学運営：全学協議会」小林光義氏（創価大学 総務課）④「学部を応援する学生組織：学部企画」関田一彦氏（創価大学 教育学習活動支援センター長）⑤「学生による学生・教員支援を通じた教育改善 - 『F工房』の取り組みを中心に -」⑥京都産業大学における学生による学生支援、教育支援の全体像について」森洋氏（京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室）⑦「本学の特色であるF工房による学生ファシリテーターの取り組みについて」中西勝彦氏（京都産業大学 共通教育推進機構職員）⑧「龍谷大学における学生と協働する学修支援の現状」長谷川岳史氏（龍谷大学 大学教育開発センター長）。

これら教員＋職員諸氏の報告にふれて、教職協働

と学生参画の意義をめぐり“これからのあり方”について強く考えさせられた総会であった。

高等教育質保証学会 第2回大会

日 時：2012年8月25日～26日
会 場：東京大学駒場校舎
参加者：安東洋

基調講演は、中嶋嶺雄氏（国際教養大学 理事長・学長）より大学の国際化と質保証の視点から『大学のグローバル化と質保証』の題で、1.グローバル化と国際化、2.「知の鎖国」と日本の大学、3.グローバルスタンダードと大学の質保証、4.国際教養大学の在り方と挑戦について講演された。

○セッション1 伊藤文雄氏（ABEST21 理事長）より、適格認定の国際的展開 - ABEST21の実践 - の題で、ABEST21の活動の現状について報告がなされ、アジア諸国の経済発展段階は様々であり、教育は時代の要請に応じた人材を育成することが目的であると講演された。

*ラウンドテーブルディスカッションは、「認証評価の国際展開」に参加。高等教育評価機構高倉副理事長、同陸 評価事業部次長、金沢工業大学木村教授、北九州工業高等専門学校安信教授の5名で認証評価の国際性の現状について話しあい、今後の展開について各機関が協働による開発が必要であるとした。

○セッション2 四評価機関（大学基準協会・大学評価・学位授与機構・日本高等教育評価機構・短期大学基準協会）より、「認証評価におけるアウトカムの考え方」、「学習成果の評価」等の考え方に関する、それぞれの現状報告と今後の進め方について説明があった。

*ラウンドテーブルディスカッション〈セッションC〉：「アウトカム・アセスメントを教育改善にどう活かせるか」に参加。大学基準協会工藤事務局長、長崎短期大学安部学長、立正大学柴氏、東洋大学渥美氏の5名で、アウトカムを次にどの様に活用するかについて話しあい、今後各機関においてシステム分析においてが協働による開発が必要であるとした。

○セッション3-1 大森不二雄 氏(首都大学東京 教授)より、「シラバス調査にみる授業実践と政策の影響」について、「背景と課題、目的、方法、調査対象等」、シラバスの経年変化と調査分析の意義及び、「調査対象科目、シラバスの記載項目等」、シラバス分析の手続き、結果、記述方法の変化、頻出語の変動、キーワードの増減、対応分析、シラバス分析の課題とまとめを、実施大学でのFDの取組・実施状況・授業デザインとシラバスに関するFD・学習成果重視の大学教育改革の動向・授業デザインとシラバスの意義・ワークショップチェックシート、FD実践の分析結果と総合考察について講演された。

○セッション3-2 合田哲雄 氏(文部科学省 企画官・高等教育政策室長)より、「学修時間と質保証」と学校教育の関連性について、人口推移、成長=人口×イノベーション、知識基盤社会においては、①「人的資本」と「社会関係資本」が最大の成長資本、就業者と高等教育修了者の関係、高等教育に関する量的規模の推計、日本の進学率、科学技術イノベーション分野の人材育成と新学習指導要領の構造

②「守・破・離」「教育は内発を誘導するための外発」、「考える力」をはぐくむ具体的なステップの明確化、「書くことは考えること・つながること」主体的に考える人材、大学生の学修時間と主体的な学びの確立、授業計画の作成、学位プログラム中心の科目編成、学習成果の把握について講演された。

*ラウンドテーブルディスカッション〈セッションC〉：「意欲や目的意識のない退学予備軍に前を向かせる」に参加。NPO法人NEWVERY山本理事長、駒澤大学猿山教授を中心に8名で、意欲や目的意識のない中途退学予備軍(学習意欲喪失者)に対し前を向かせるシラバスについて各大学等の現状を話し合った。そこでは文字シラバスの限界に言及しつつ、シラバスの「見せる化」をめぐる、シラバスの内容と現実の間にギャップがあり、かつては先輩から後輩へ口伝があったが、今では社会がもっとも必要としているコミュニケーションすらなくなっていることを踏まえ、退学予備軍(学習意欲喪失者)に対するシラバスについては、現状では、限界があり新たな手法による開発が必要であるとした。

FD 関連フォーラム等参加報告

シンポジウム

『学習成果分析－「学び」の可視化を目指して－』

日 時：2012年5月26日

会 場：立命館大学

参加者：石山健一

近年、労働市場の国際化が進んだことで就職戦線が厳しくなっている情勢の中で社会に対して大学におけるグローバル人材育成の成果をアピールしていくには、交換留学生の数のような数値のアウトプットだけでなく具体的な成果を示す必要があるといえるでしょう。こうした学習成果の可視化にeポートフォリオが有用であるということを、このシンポジウムで学びました。

FD研修会

『東洋大学新任教員FD研修会』

日 時：2012年6月16日

会 場：東洋大学

参加者：石山健一

非常勤講師として私が参加した東洋大学の研修で印象に残ったのは、学生FD報告とグループディスカッションでした。東洋大学学生FD研究チームによる報告では、学生の視点からの授業改善アイデアが紹介され、学生が積極的にFDに参加していることに驚かされました。グループディスカッションでは、新任教員でグループを作って授業における工夫や問題解決方法などについて話し合いました。ファシリテータ役の先生の裏話が面白かったです。

第18回FDフォーラム

『キャリア教育の現状と課題』

日時：2013年2月23・24日

会場：京都

参加者：石山健一

私が参加したのは2つの会場に分かれて開催されたシンポジウムのうち「学生とともにすすめるFD」です。立命館大学、追手門学院大学、京都文教大学、京都産業大学の学生が、いずれも学生らしい視点でプレゼンを行いました。対話形式でのプレゼンあり、寸劇あり、と、教職員ではできないような趣向を凝らした発表スタイルには大変感銘を受けるとともに、FD活動の新たな可能性を垣間見た気がしました。これほどやる気のある学生達を見たのは久しぶりです。

FDフォーラム2日目は「キャリア教育の現状と課題」をテーマとする第2分科会に参加しました。京都学園大学では「学生が卒業後自らの素質を向上させ、社会的職業的に自立を図るために必要な基礎能力」の育成状況を調査したところ、課題発見力については十分、コミュニケーション力は不十分という結果が得られたそうです。京都産業大学では、キャリア教育について科目間の関係や全体像が学生にも運営側にも分かりにくいものになっているという現状を改善するためにワーキンググループを立ち上げ、グループのメンバー全員で科目の内容を把握し、再編作業に取り組んでいるそうです。いずれの取り組みも、キャリア教育の現状把握方法として参考になると思います。一方、名桜大学では、就職活動において「行動しない学生」の割合が多いことが問題になっていたようです。入学から卒業までの学生支援プログラムに先輩学生を取り込んだところ、それが功を奏して大学の雰囲気が悪くなったとの報告がありました。学生による大学改革には大きな可能性があると考えられます。名桜大学のような成功事例の報告は、学生のFDへの取り込みが全国にひろがる契機になるかもしれません。

最後に

今年度も様々な場でFDに関する勉強をさせて頂きました。また、FDに取り組む全国の大学教員、職員、学生とも交流することができました。このような貴重な機会を私に与えて下さった本学FD委員会には大変感謝しております。この経験を今後活かせるようまい進するつもりです。

第18回FDフォーラム 第3分科会

『学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ』

日時：2013年2月24日

会場：京都

参加者：佐藤研一

この分科会には全国から100名をはるかにこえる授業アンケート担当者が集まった。5時間30分の予定で開催されたこの分科会は、慶応義塾大学総合政策学部の井下理氏の基調講演にはじまり、東北大学高等教育センターの関内隆氏をはじめとする、専門家、実務経験者4名による4件の報告からなる午前の部と、九州大学基幹研究院の田中岳氏がコーディネーターを務めたワークショップ「学生による授業アンケート：現状・課題・発展」をはじめとした4つのワークショップにわかれて意見交換を行なう午後の部の2部構成で行なわれた。

井下氏は、わが国における授業アンケートの歩みを踏まえ、現在、授業アンケートが、これまでの“お客様アンケート”型のモニター目的のものからコミュニケーション目的のものへと向かうべき方向が変わったことを指摘し、関内氏も、氏が行なったアンケート実施についての実態調査で明らかになった「教員評価への活用を行なう大学はほとんどない」、「無記名式から記名式へ変更する大学が増えている」といった「評価のための」、から「互いに知り合うための」へという授業アンケートの位置づけの転換にかかわる事例等について報告していた。また、より現実感のある地に足のついた活動をとというメッセージも双方に共通していた。

その他の報告等も概ねこうした視点を共有しており、授業アンケートの常識が大きく転換したことを、あらためて実感する機会となった。

私立大学情報教育協会

『FDのための情報技術講習会』

日時：2013年2月26～28日

会場：大阪経済大学

参加者：桜井美加

平成24年度FDのための情報技術講習会は、大阪経済大学を会場として開催された。第1日目の午前中は「ICTを活用した双方向授業の例」の共通講義であった。まず上智大学田宮徹教授から、ICTを授業に適用することで、学生が自ら進んで学修する為

に動機づけの工夫、概念理解の形成、学習意欲の工夫が挙げられ、これらを達成するための教材のWeb化と双方向の授業、学生の理解度を把握しつつ参加意識を醸成することの重要性が述べられた。大阪経済大学の家本教授は、PBLからTBLの経緯、加えてアクティブラーニングの実践例（学生に3名の小グループで企業のプランを立てさせる）について発表があった。名古屋学院大学の児島完二教授からは予習・復習を前提とした授業-ICTで学習時間を補完する-というタイトルで講義があった。その講義は、LMS（Learning Management System）を使って、授業後の学習のためのMinute Paper（WebからLMSへログインして提出）や授業理解度調査（Web上のクイズを活用）、学生がLMSから教員へ質問することができる電子講義板授業事前学習としてのWeb上での自学自習クイズや小テストである。またこれらの提出回数などはデータとして蓄積され成績評価にも使用できるので、成績の公明性、適正化にも役立つ。立正大学の今井賢教授からは、クリッカーを活用した出欠管理、小テスト、アンケートについての発表があっ

た。創価大学高木教授からは、話し合い学習法を活用したグループワークの試みと効用について語られた。神奈川大学中村教授からは、授業中配布する資料や、ビデオや写真著作権についての説明があった。

第1日目の午後からは、3コースのプログラムが用意された。プレゼンテーションコースでは、パワーポイントを使用してアクティブラーニングを見据えた教材作成と双方向の授業について行われた。Webを使用した教員と学生とのやりとりは、ツイッターやフェイスブックを彷彿とさせる方法で臨場感と面白さがあった。プレゼンテーションアドバンスコースでは、写真やユーチューブを視聴覚的に活用した教材の作り方やPreziというソフトの学習、BB Flash Backについて学んだ。授業デザインコースでは、双方向授業・能動学修に向けた授業デザインと模擬授業計画の相互紹介および相互評価が行われた。研修に携わる講師は皆有能な方々で、学生の立場から、このように親しみが持てて情熱的な授業が面白いのだと実感することができ、またパソコン操作は助手により個々のサポートが付き、充実した研修となった。



FD 委員活動報告

平成24年度

○FD委員会

- 第1回FD委員会を平成24(2012)年5月26日(土)開催
- 第2回FD委員会を平成24(2012)年7月28日(土)開催
- 第3回FD委員会を平成24(2012)年9月29日(土)開催
- 第4回FD委員会を平成24(2012)年12月8日(土)開催
- 第5回FD委員会を平成25(2013)年1月26日(土)開催

第6回FD委員会を平成25(2013)年3月16日(土)開催

○FDシンポジウム ※詳細は「内容報告」参照(pp.〇～〇)

第8回「第2期(平成23～24年度)FD委員会の取組」

第1～5ワーキンググループの報告

○FD研修会

第1回「カリキュラムの可視化マップ作成研修会」

1. カリキュラムマップ作成方法
 2. カリキュラムマップ作成
- 以上



BOOKS FD 関係図書情報

FD推進室では、FDに関係する図書資料や、文部科学省プログラム採択された事業の報告書等、他大学のFD報告書やニュースレターを収集し、専任教員の方々にFD推進室で閲覧いただけるようにしています。貸出も可能ですので、FD推進室に直接お越しいただくか、メールまたは電話にてご連絡ください。

FD推進室で所蔵した方がよいと思われる書籍がありましたら、各FD委員に推薦ください。



DVD授業ライブラリー
神奈川工科大学教育開発センター



大学改革を成功に導く
キーワード30
学事出版

FD 委員会規程

制定 平成21年 2月25日

(趣旨)

第1条 国士舘大学の教員の教育研究活動、とりわけ授業内容・方法を改善し、教育能力を向上させるためファカルティ・ディベロップメント(以下「FD」という。)の方策を恒常的に検討し、各学部等において組織的な取り組みを進めることにより、学士力及び研究力を身につけさせる教育を実施することを目的として、FD委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(構成)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 副学長(兼FD推進室長)
- (2) 各学部教授会から選出された者各1名
- (3) 各大学院研究科委員会から選出された者各1名
- (4) 各附置研究所所員会から選出された者各1名
- (5) 学長室長、教務部長及び教務部事務部長
- (6) 学長が委嘱した者若干名

2 委員長は副学長(兼FD推進室長)をもって充て、副委員長は前項第2号から第6号までに定める委員の中から学長が任命する。

3 第1項第2号、第3号、第4号及び第6号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。なお、任期の途中で交代する場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営)

第3条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を行う。

3 委員会は、委員総数の過半数の委員の出席をもって成立する。

4 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって議決し、可否同数のときは、議長が決する。

5 委員長は、必要と認めた場合、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(協議事項)

第4条 委員会は、教育研究活動改善の方策に関する次の事項を協議する。

- (1) FD活動の企画立案に関する事項
- (2) 授業評価の実施の運営方法に関する事項
- (3) 各学部等が行うFDの支援に関する事項
- (4) FDに係る講演会、研修会に関する事項
- (5) FD活動の自己点検・評価に関する事項
- (6) その他FDの推進に必要な事項

(庶務)

第5条 委員会の庶務は、教務部教務課の協力を得てFD推進室が行う。

(改廃手続)

第6条 この規程の改廃は、委員会の議を経て理事会で決定する。

附則

1 この規程は、平成21年2月25日から施行する。

2 この規程の施行に伴い、最初に委嘱された第2条第1項第2号、第3号、第4号及び第6号の委員の任期は、第2条第3項の規定にかかわらず、平成22年3月31日までとする。

編集後記

『国士舘大学FDニュースレター』第3号をお届けします。

本学内外の多くの皆様のご支援の中、「国士舘大学FD委員会」の活動も第2期を終了し、本年3月16日には第8回となる「国士舘大学FDシンポジウム」が開催され、本委員会の各ワーキング・グループにより活動報告がなされました。その一部は本ニュースレター上にも報告されておりますので、ご参照ください。幸いです。

「大学教育」をめぐる昨今の社会的状況の変化の激しさにはまさしく私たちの想像を超えるものがあり、この1年に限ってみても、安倍新政権の発足とも相まって、非常に多くの問題が日々突きつけられているのが現状です。

国際化と少子化の波に抗うことのできない日本社会

の中にあって、いかなる形で学生を確保し、かつその質を担保するののかという喫緊の課題に取り組むことは、日本の全大学の責任であり、本学もまさにその責任を負っていることは言うまでもありません。そうした中、本学FD委員会は初めての試みとして、昨年12月22日、愛媛大学の佐藤浩章先生(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室副室長准教授)の貴重なご指導と本学所属の多くの教職員参加のもと、「国士舘大学第1回FD研修会」を開催し、本学の各機関(特に学部所属の各学科・専攻)の「カリキュラムマップ」作成の実践的演習を実施しました。今後も皆様のご支援のもと、国士舘大学の「教育」の諸課題に対する具体的・実践的取り組みが広がってゆくことを希望して止みません。

(編集委員：和田義浩)